

## ただいま

「ドンドン、バタン」、子どもが階段を上がり、ドアを荒く閉める音がします。

いつもは、「ただいま、お腹空いた。」と言いながら、台所に入ってくる中学生の娘が、今日は部屋に閉じこもったまま出てきません。

「どうしたの、何か、学校であったの？」

優しく声をかけながら様子を見に行っても、下を向いて黙ったままです。

しばらく見つめていると、突然、

「お母さん、転校するにはどうすればいいの。」と泣きながら言い出しました。

あまりに急なことで、びっくりして、理由を聞いてみると、あるクラスメートとつき合っているとうわさをおもしろおかしく立てられて、携帯電話のメールで一瞬でひろまったそうです。

いつも誰かに見られているんじゃないか、うわさをされているんじゃないかと、とても気になって、学校をかわりたいと思ったようです。

「そう、大変な思いをしていたのね。お母さんも中学生の頃、同じようにいやな事があったわ。」

そう言いながら、いやなうわさが立ってつらかった自分の体験を娘に話しました。当時、ささいなうわさにどれほど心を痛めたか、うわさが落ち着くまでの数日間が、どれほど長く、苦痛でたまらなかったか。けれども、そのとき、両親や友人のちょっとした優しい励ましで、どれだけ心が救われたかを話しました。

「お母さんにも、そんなことがあったんだ。」

娘も、自分の思いを話し、私の話を聞いて、少し気持ちが落ち着いてきたようです。

「あなたは小さいとき、よく風邪をこじらせて病院に入院したものよ。小さな腕に点滴の針を打たれていたのが、今、こんなに大きくなってきて。あなたがいてくれるだけで、どれだけお母さんはうれしいか。」

「だからね、何か変わったことや我慢できないことがあったら、ひとりで抱え込まずに相談してね。何があっても、お母さんやお父さんはあなたを守るからね。」

私は自分の思いを、精一杯伝えると、娘も、涙をぬぐって、うなずき返しました。

それから数週間、娘と話をする時間を、少しずつつくっていくと、娘にも徐々に明るさが戻ってきました。

「ただいま、お腹空いた。何か食べるものない。」

娘が笑顔で帰ってきました。